福岡教育大学紀要，第61号，第１分冊，39―45（2012）

Almayer's Folly における孤独な夢想家の主人公

The Hero as a Lonely Dreamer in *Almayer's Folly*

古　賀　元　章　　山　本　一　夫

Motoaki KOGA　　Kazuo YAMAMOTO

英語教育講座　　北九州工業高専

（平成23年９月30日受理）

はじめに

ポーランド生まれのジョウゼフ・コンラッド（Joseph Conrad, 1857－1924）はイギリス人の船員となって，1887－88年に東南アジアのインドネシア領ボルネオやシンガポールといったマレー群島を航海している。彼の処女作品 *Almayer's Folly*（1895）は，そのときの航海体験に基づいて書き綴られている。この小説の表題の一部となっている主人公オールメイヤーは，コンラッドがボルネオの密林で出会った人物の名前に由来する。[1] その由来に関連したエピソードの一端が彼の *A Personal Record* の中で，次のように述べられている。

> What he［Almayer］wanted with a pony goodness only knows, since I am perfectly certain he could not ride it; but here you have the man, ambitious, aiming at the grandiose, importing a pony, whereas in the whole settlement at which he used to shake daily his important fist, there was only one path that was practicable for a pony: a quarter of a mile at most, hedged in by hundreds of square leagues of virgin forest. But who knows? The importation of that Bali pony might have been part of some deep scheme, of some diplomatic plan, of some hopeful intrigue. With Almayer one could never tell. He governed his conduct by considerations removed from the obvious, by incredible assumptions, which rendered his logic impenetrable to any reasonable person.（76）

人があまり訪れたことのない密林で，なぜオールメイヤーがバリ産の小馬を注文するのか誰もわからなかった。その上，その注文が，深いたくらみ，駆け引きのある計画，期待のできる陰謀なのか誰も言い当てることができなかった。彼は，分別のある人には不可解な論理により支配されていた。他の箇所で“if I had not got to know Almayer pretty well it is almost certain there would never have been a line of mine in print.”（87）と記されているように，この人物の存在がコンラッドの処女作品を誕生させたと言っても過言ではないであろう。

密林に住む人物のエピソードから，オールメイヤーは周囲の人々から孤立して何かを夢見る人物としてわれわれ読者に印象づけられるであろう。この印象がコンラッドの小説に登場する主人公の姿に反映されているように思われる。

では，小説では主人公が孤独な夢想家としてどのように描かれているのであろうか。また，彼はコンラッドのどのような視点のもとで書かれているのであろうか。本稿はこれらの点を探究してみたい。

1

ボルネオにあるパンタイ（Pantai）河から数十マイルさかのぼった場所に，マレー人のサンバー（Sambir）部落がある。この部落は周囲を密林によって閉ざされているので，河が他の社会と接触する役割を果たしている。そこでは，ただ一人の白人である主人公のオールメイヤーが住居を構えている。

Almayer's Folly は，この主人公が日没に近づく頃に交易所の前を流れるパンタイ河を眺めている情景から始まる。その情景の内容は次の通りである。

> "KASPER! Makan!"
>
> The well-known shrill voice startled Almayer from his dream of splendid future into the unpleasant realities of the present hour. An unpleasant voice too. He had heard it for many years, and with every year he liked it less. No matter; there would be an end to all this soon.
>
> He shuffled uneasily, but took no further notice of the call. Leaning with both his elbows on the balustrade of the verandah, he went on looking fixedly at the great river that flowed—indifferent and hurried—before his eyes. He liked to look at it about the time of sunset; perhaps because at that time the sinking sun would spread a glowing gold tinge on the waters of the Pantai, and Almayer's thoughts were often busy with gold; gold he had failed to secure; gold the others had secured—dishonestly, of course—or gold he meant to secure yet, through his own honest exertions, for himself and Nina. He absorbed himself in his dream of wealth and power away from this coast where he had dwelt for so many years, forgetting the bitterness of toil and strife in the vision of a great and splendid reward. They would live in Europe, he and his daughter. They would be rich and respected. Nobody would think of her mixed blood in the presence of her great beauty and of his immense wealth. Witnessing her triumphs he would grow young again, he would forget the twenty-five years of heart-breaking struggle on this coast where he felt like a prisoner. All this was nearly within his reach. Let only Dain return! And return soon he must—in his own interest, for his own share. He was now more than a week late! Perhaps he would return to-night. (3-4)[2]

この小説の幕開けは，食事を知らせる妻の声である。しかし，彼女の聞き慣れた不愉快な声が，オールメイヤーを素晴らしい未来から厭な現実に帰らせる。このことは，彼と妻との関係がうまくいっていないことを暗示している。

加えて，仮定法で使う would が繰り返し用いられている。ここには，オールメイヤーが素晴らしい未来を夢見ている様子が強調されている。彼は，日没の頃のパンタイ河を眺めるのが好きであった。なぜなら，沈みゆく太陽がこの河の水面に黄金の色合いを繰り広げるからである。彼の頭の中にあるのは，黄金をもうすぐ手に入れて富と権力をほしいままに操り，美しくなった最愛の娘ニーナ（Nina）と一緒にヨーロッパで優雅に暮らすことである。そのために，彼は二人の人生に幸せをもたらすことになっているデイン・マルーラ（Dain Maroola）を待ちわびているのである。なぜなら，この若者から黄金の分け前をもらうことになっているからである。デインの帰りが１週間も遅れているが，今晩あたりではないかと，彼は楽天的に考えている。

ところが，続く文章はオールメイヤーの前途が多難であることを予示する。

> Such were Almayer's thoughts as, standing on the verandah of his new but already decaying house—that last failure of his life—he looked on the broad river. There was no tinge of gold on it this evening, for it had been swollen by the rains, and rolled an angry and muddy flood under his inattentive eyes, carrying small drift-wood and big dead logs, and whole uprooted trees with branches and foliage, amongst which the water swirled and roared angrily. (4)

彼に関連した描写—新しいが朽ち始めた家，濁水の急流，流木に遮られた水の渦巻きや轟音—が，彼の今後の人生に暗い影を投げかけている。周囲の環境は単なる視覚的な光景ではなく，彼の現在の心境も伝える働

きをするのである。この主人公の独りで夢見る世界に欠かせないのが，ニーナとデインである。

2

ここで小説は，フラッシュバックの手法を用いて，冒頭のオールメイヤーの現状に至る経緯を描いている。20年前，彼はインドネシア中部のセレベス島のマカッサル（Macassar）で貿易商のオーナーであるオランダ人フーディッグ（Hudig）の事務員として雇われた。彼は，同国のジャワの海岸で質素な平屋生活を送っていたので，この就職に異論がなかった。その上，彼の新しい人生は，世界を股に掛けるという大きな夢を抱いて始まった。

オールメイヤーはフーディッグが経営する倉庫で働いていた。当時のマカッサルは，活気のある交易の場所であった。オーストラリアの沿岸で帆船の準備をし，財産と冒険を求めてマレー諸島に行く勇敢な者たちは，交易と気晴らしのためにマカッサルを利用した。彼らや土着民から“‘the Rajah-Laut’—the King of the Sea”（7）として尊敬されていたのが，トム・リンガード（Tom Lingard）という船長であった。オールメイヤーはこの地に上陸して3日と経たないうちに，彼の名前を知った。倉庫を管理していた出納係のヴィンク（Vinck）から，リンガード船長についての興味深いエピソードを聞いた。それは，船長が海賊一味と闘って勝利を収めたが，敵の船内に生き残っている少女を見つけたことである。彼は，この少女を養女として引き取り，ジャワの修道院で教育を受けさせたが，行く行くは彼女に全財産を譲るつもりであった。

こうして，1年ほどが過ぎると，オールメイヤーは商売の関係上，リンガード船長と頻繁に会うようになった。突然，船長は彼を船長付きの事務員として雇いたい旨をオーナーのフーディッグに申し出た。オーナーはもちろん，この申し出を了承し大喜びをした。さらに，オールメイヤーとリンガード船長が日増しに親しくなった数か月後のことであった。船長が養女と結婚するつもりはないかと打診すると，彼はその話を受け入れた。なぜなら，彼女と結婚すれば，船長の財産を獲得して，アムステルダムの大邸宅での生活が実現するからであったし，彼女は早死するかもしれないからでもあった。

現在の妻と結婚したいきさつを思い出した後，オールメイヤーは我に返り，日没になったので家に帰ろうとする。彼の目の前に，急流と闘ってこちらに向かう男たちが現れた。そのとき，“‘Dain!’” he exclaimed. ‘At last! at last! I have been waiting for you every day and every night. I had nearly given you up.’”（13）と，彼は歓喜の声を相手に伝える。すると，“‘To-morrow's sun shall see me in your house, and then we will talk. Now I must go to the Rajah.’”（13）と，従者を伴ったデインは返答する。デインが口に出す“the Rajah”は，対岸に住む酋長ラカンバ（Lakamba）を指す。ここでは，理由が明らかにされていないが，彼はその晩，オールメイヤーの家に行かずに，従者と共にその酋長の住居を目指して去ってしまう。

そうしたデインの態度に一抹の不安を感じながらも，オールメイヤーは家でニーナに，“‘I am almost happy to-night, Nina. I can see the end of a long road, and it leads us away from this miserable swamp. We shall soon get away from here, I and you, my dear little girl, and then —’”（17）と語って，人生に活路を見出した思い，安堵した言葉をかける。その夜，彼は熟睡するが，そばにいる娘は一縷の望みと不安が交差する心境である。

こうして，オールメイヤーは，周りから浮いた存在となり，身内の者（妻，娘）とも感情のズレが生じている。したがって，小説を読むにつれて，彼の孤独な夢想家としての性格が一層明らかになってくる。彼の夢の世界は，元来，リンガード船長の財産の移譲を期待して成り立っている。その世界では，船長に加えて，娘のニーナと若者のデインが重要な構成メンバーとなっているのである。

ここでフラッシュバックの手法が再び用いられる。オールメイヤーは義父のリンガード船長の行動を思い返す。船長は，パンタイ河の奥地のサンバー部落に，新居と倉庫を建てた。新居は若夫婦のためであったし，倉庫はオールメイヤーが大規模な取り引きができるようにするためであった。そこへ行く経路は彼しか知らないので，この部落での交易はリンガード商会が取り仕切っていた。そこで，オールメイヤーは当初，これで世界が自分のものになるという大きな希望を抱いた。しかし，船長が黄金とダイヤモンドを探し求めて，奥地の探検に出かけて不在となったとき，アラブ人の貿易商たちがパンタイ河を見つけて，そこに交易所を開設し，これまで独占していたリンガード商会の仕事を奪った。なぜなら，オールメイヤーは彼らと商売を競う力量がなったからであった。金の貸し手であったフーディッグの会社が倒産したために，商会は資金源を絶たれ，その上，船長の度重なる探検のためにこれまでの蓄えがなくなってしまう。今回も船長は，

ボルネオの奥地の金鉱を探す目的でヨーロッパに行ったが，彼の所在と身の安否がオールメイヤーには皆目わからなかった。

オールメイヤーの妻は結婚後間もなく，野性的で粗野な性質を露わにし，夫をはじめとする西洋的文明に対して反抗的な態度をとるようになった。そこで，現在の逆境を嘆いたり，ヨーロッパで豪華な生活を夢想したりしながら，彼が心から頼りにするのは娘のニーナであった。

船長は，金鉱の発見にまたも失敗して突然戻って来たが，落ち着く暇もなく資金調達のためヨーロッパに行った。その際，彼は一緒にニーナを連れて行き，シンガポールの知人に彼女の教育を依頼した。船長の留守中，オールメイヤーは娘を連れ戻す勇気もなかったし，リンガード商会は益々さびれていった。自分の夢を実現させるために必要であった船長が彼の夢想の世界の構成メンバーから外れることになるのである。

10 年の月日が経ち，ニーナが思いがけず戻って来た。その理由は，混血児であるために，当地でいじめられて追い出されたためであった。船長の遺産をあてにできなくなった今，オールメイヤーは美しくなった娘と一緒にヨーロッパで豪華な生活をするために，自分で金鉱を探し当てることを決めた。そこで，彼は探検の資金がどうしたら得られるのかを考えていた。

そうこうするうちに，この流域にある噂が広まった。それは，オランダ人に代わってイギリス人がこの流域を支配するであろうという噂であった。オールメイヤーは衰退した交易を復活させるチャンスだと喜び，イギリス人の商人を歓迎するための家を新築した。しかし，その噂はいつのまにか消えてしまった。

オランダの支配がそのまま続くことになったばかりではなく，同国の海軍士官たちが改めてサンバー部落を訪れ，オールメイヤーの家に立ち寄った。着飾った彼の言葉と，それに反応する彼らの態度が次のように描かれている。

> Almayer in his white jacket and flowered sarong, surrounded by a circle of glittering uniforms, stamped his foot to show the solidity of the neatly-fitting floors and expatiated upon the beauties and convenience of the building. They listened and assented, amazed by the wonderful simplicity and the foolish hopefulness of the man, till Almayer, carried away by his excitement, disclosed his regret at the non-arrival of the English, “who knew how to develop a rich country,” as he expressed it. There was a general laugh amongst the Dutch officers at that unsophisticated statement, and a move was made towards the boats; ... (35-36)

彼は，自分の建設中の新居が美しさと利便性を兼ね備えていることを得々として話したばかりではなく，賢明なイギリス人が来ないのが残念であることもつい口を滑らした。オランダ将校たちは，彼の話に耳を傾けながらも，心の中では彼の単純で愚かしい性格をせせら笑った。

オランダ将校たちが戻った小艦隊では，オールメイヤーの愚行が話の話題となった。その愚行が地域の船乗りたちにまで伝わり，彼の建設中の建物は，“Almayer’s Folly”[3]（37）というあだ名で呼ばれた。このあだ名がコンラッドの小説のタイトルに由来するが，あだ名とタイトルに共通した“Folly”は，「阿房宮」という場所ばかりではなく，主人公の愚行という意味合いも含まれているであろう。なぜなら，彼の住む建物には，この愚行が満ち溢れているからである。

その年のある日，デインという見知らぬ若者（実は，インドネシアのバリ島の酋長の息子）が，オールメイヤーに会いに来た。その目的は，オランダ政府の命令で禁止された火薬をオールメイヤーの尽力で手に入れることであった。彼は金鉱の探求を援助してくれることを条件で同意し，客人はその援助を了解した。ところが，二人の商談をきっかけに，デインとニーナが相思相愛の仲となった。また，彼は数日後に戻って来ると約束して帰ったが，いくら待っても姿を現さなかった。

3

ここでフラッシュバックの手法が再び終わる。確かに，この手法は現在の主人公の状況を理解するのに役立つ（Schwarz 82）と言える。加えて，この手法と現在の繰り返しはわれわれに，“delayed decoding”（Watt 175）の印象を与えて，彼の先行き不安な運命の展開を予知させるであろう。こうして，ついにオールメイヤーがデインと再会した背景が明らかになると同時に，主人公の人生に暗い影が忍び寄ることにな

る。

場面はその再会後に移る。当日の彼は，オールメイヤーの家に長居をせず，その足で対岸にいる酋長のラカンバの家に向かう。そこで彼は，対面した酋長とその腹心ババラッチ（Babalatchi）に訪問した理由を話す。火薬を積んだ彼の船が，オランダ軍に発見され，焼夷弾を受けた。その結果，多くの部下たちが死んだが，生き残ってやっと辿り着いた彼は，オランダ人が早速ここまで自分を探しに来ることを伝えるのである。その話を聞いて，酋長は彼に，恋人のニーナに会いに来たのではないかと答える。ババラッチは二人の仲介の労をとって，デインが身を隠すことを提案する。彼はこの提案を受け入れ，その日のうちに密林の奥にある入植地に潜むことになる。

翌日の朝，オールメイヤーが目を覚ますと，パンタイ河の三角州に，昨夜の嵐で打ち上げられた丸太と共に，一つの死体があることを耳にする。肉眼では判別が不可能であった死体は，腕に付けられた指輪から，デインであると見なされる。実際には，その死体は彼の部下である。この画策は，オールメイヤーの妻が案じたものであった。それは，娘の恋人がオランダ軍の追跡の手から逃れるためであったし，また，夫たちを惑わすためでもあった。

実情を知らないオールメイヤーは，残存する火薬取引の違反者を探索するために訪れたオランダ軍に，溺死体がデインであると告げ，彼らと一緒にやけ酒を酌み交わす。彼がこのように振る舞うのは，デインから援助を受けて黄金を手に入れ，ヨーロッパに帰る夢がやぶれたからである。

その間，ニーナは密かにカヌーを漕ぎ出して，恋人が隠れている場所へ向かう。同夜，奴隷のタミナー（Taminah）が現れて，眠っていたオールメイヤーに，事の真相を密告する。その真相を知って驚愕し，早速彼は二人がいる隠れ家へ行く。現地では，感情的に高ぶった彼と二人の間で言葉のやりとりが見られる。彼はデインに向かって“‘You thief!’”（178）と叫ぶと，相手は穏やかな口調で，“‘Nay, Tuan,’... ‘that is not true also. The girl came of her own will. I have done no more but to show her my love like a man; she heard the cry of my heart, and she came, and the dowry I have given to the woman you call your wife.’”（178）と返事する。それを聞いて，怒りと屈辱のあまりうめき声を上げて，オールメイヤーは娘に向かって，“‘Tell me,’... “‘tell me, what made you give you, your mother and that man? What made you give yourself up to that savage? For he is a savage. Between him and you there is a barrier that nothing can remove.’”（178）と詰問する。それに対して，彼女は“‘I am not of your race. Between your people and me there is also a barrier that nothing can remove....’”（179）と答える。

娘の返答は，この地に留まってひたすら白人社会への帰属を夢想するオールメイヤーを痛烈に批判したものとなっている。今回の彼女の行動は，そうした父親のはかない夢想の世界から脱出することを意味するのである。これは，いわば，二人の夢の葛藤で，この小説のクライマックスの一つでもあると言えよう。

コンラッドは，娘の返答を聞いたオールメイヤーの反応を，“he ... stopped short, astounded at the completeness of his misfortune.”（179）と記述している。この反応から，彼は自分の夢が完全に崩れ去ることを実感するのである。なぜなら，その夢を支える大きな要素である娘が彼のもとから離れるからである。

オールメイヤーは，しばらくして冷静さを取り戻し，ニーナとデインに次のように語る。

> “I will never forgive you, Nina—never! If you were to come back to me now, the memory of this night would poison all my life. I shall try to forget. I have no daughter. There used to be a half-caste woman in my house, but she is going even now. You, Dain, or whatever your name may be, I shall take you and that woman to the island at the mouth of the river myself. Come with me.”（184）

彼は，夢想の世界からばかりではなく，自分の現実の世界からも二人の存在をなくしてしまおうとする。そのため彼は，二人を河口の外にある小島まで案内する。そのとき，実情を知ったオランダの士官たちはボートで近づいて来るが，一行の存在に気づかずに通り過ぎて行く。

翌日，酋長の命令を受けた男が船でやって来て，若者と恋人を二人が目指すバリー島へ護送する。彼らを見送った後，オールメイヤーは築き上げていた夢想の世界を完全に取り壊すために，その場で娘の残っていた足跡を一つひとつ丹念に消していった。その結果，盛り上がった砂の山は，まるで水際まで続く小さな墓のような形になった。

オールメイヤーの夢想の世界を支える人物はついに消え去った。彼にとってこれからの人生でしなければ

ならないことは，その世界に住む自分をなくすことである。自宅に戻った後，彼はアヘンの常習者となり，廃人として孤独のうちに死んでいく。

4

コンラッドは *Almayer's Folly* に付けた“Author's Note”の中で，“there is a bond between us and that humanity so far away.”（viii）と述べた後，次のように書き記している。

> I am content to sympathize with common mortals, no matter where they live; in houses or in tents, in the streets under a fog, or in the forests behind the dark line of dismal mangroves that fringe the vast solitude of the sea. For, their land—like ours—lies under the inscrutable eyes of the Most High. Their hearts—like ours—must endure the load of the gifts from Heaven: the curse of facts and the blessing of illusions, the bitterness of our wisdom the deceptive consolation of our folly. (viii)

コンラッドは，西洋人であれ，遠く離れた東洋の現地人であれ，彼らに共通点があることを指摘しようとしている。その共通点は，直面する現実に耐えなければならない人間の微力さである。天から見たら，その微力が，喜びとする幻想，はかない知恵，まやかしの慰めとなる愚行となって表れるのである。こうした人間の特徴を演出しているのが，現実の重圧に耐える孤独な夢想家の主人公である。

おわりに

Almayer's Folly の主人公は，小説の表題が物語るように，いわゆる「阿房宮」を中心にして愚行を繰り返して，はかない夢を希求する夢想家である。そうした人物描写の悲劇を浮かび上がらせる役割を果たしているのが，フラッシュバックの手法と現実描写の手法を交互に取り入れて，話の展開を蛇行させる小説の構造である。

こうした構造には，最初は西洋人に優越感を与えて，そこから彼らに感情移入させるコンラッドの狙いがあったと思われる。この感情移入をきっかけにして，彼は西洋人に，人間一般に共通した特徴（現実に対する微力さ）を気づかせようとしたのであろう。こうした構造はまた，屈折した主人公の愚かさを前面に出して，そこからこの特徴を今日でも洋の東西の読者に理解させようとしていると言えよう。

注

1. モデルとなったこの人物の本名は，William Charles Olmeijer であった。彼の詳細については，吉田氏が指摘するように（注 63），Gordon 35-44 を参照。
2. 括弧内の数字は原作の頁を表す。
3. 小説の表題の“Folly”は「阿房宮」と日本語訳されている。

引用文献

Conrad, Joseph. 1895. *Almayer's Folly: A Story of an Eastern River. Almayer's Folly: A Story of an Eastern River; and Tales of Unrest.* London: J. M. Dent, 1947.

---. “Author's Note.” *Almayer's Folly: A Story of an Eastern River; and Tales of Unrest.* vii-viii.

---. *A Personal Record: Some Reminiscences. The Mirror of the Sea: Memories and Impressions; A Personal Record: Some Reminiscences.* 1946. London: J. M. Dent, 1960. 1-138.

Schwarz, Daniel R. “Acts of Initiation in Almayer's Folly and An Outcast of the Islands.” *Ariel* 8.4 (1977): 75-97.

Gordon, John Dozier. *Joseph Conrad: The Making of a Novelist.* New York: Russell and Russell, 1963.

Watt, Ian. *Conrad in the Nineteenth Century*. Berkeley: U of California P, 1979.
吉田徹夫.『ジョウゼフ・コンラッドの世界―翼の折れた鳥』. 東京 : 開文社, 1980.